UDLM

7

vol.321

July 31st
2022

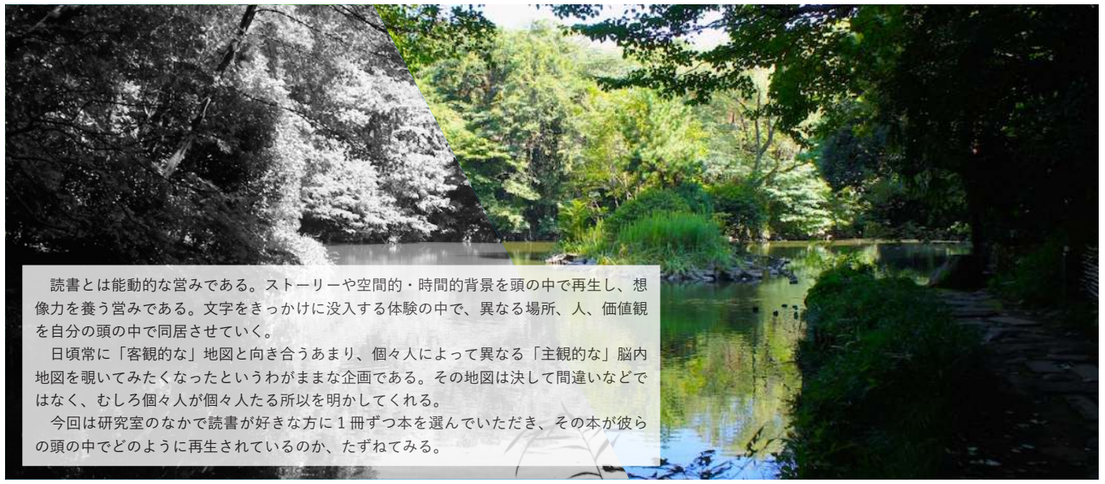
各々に思い耽る

p.2-3　小説と想像力
p.4-6　ぼっち空間アンケート

▲とある老舗旅館にて

URBAN DESIGN LAB. MAGAZINE

小説と想像力



読書とは能動的な営みである。ストーリーや空間的・時間的背景を頭の中で再生し、想像力を養う営みである。文字をきっかけに没入する体験の中で、異なる場所、人、価値観を自分の頭の中で同居させていく。

日頃常に「客観的な」地図と向き合うあまり、個々人によって異なる「主観的な」脳内地図を覗いてみたくなったというわがままな企画である。その地図は決して間違いなどではなく、むしろ個々人が個々人たる所以を明かしてくれる。

今回は研究室のなかで読書が好きな方に１冊ずつ本を選んでいただき、その本が彼らの頭の中でどのように再生されているのか、たずねてみる。

学部４年
島田　楓

On the Road

Jack Kerouac　著
Viking Press(1957)

本の概要と好きな理由

舞台は 1940 ～ 1950 年代のアメリカ。語り手 Sal が奔放な男 Dean と出会い、ニューヨークを飛び出して広大なアメリカ大陸を自由気ままに放浪する物語です。初稿はタイプライターを使って３週間で書き上げられましたが、紙をいちいち交換していては言葉の流れの妨げになるということで、Kerouac はトレーシングペーパーをテープでつないだものを使い、その長さは 36m にもなったといいます。そうした**軽快でパワフルな筆致に胸が躍り、登場人物と一緒に旅をしているような気分**になります。

Sal は全４回の旅を決行しますが、そのルートは毎回異なります。道中で様々な都市に立ち寄り、新しい人々に出会うのです。ベーカーズフィールドの農家で綿花を摘む少女、デンヴァーで石炭の貨車を運転するシングルマザー、サンフランシスコで観客を熱狂させるジャズバンド。Sal の眼差しを通して、**それぞれの土地で営まれる生活が浮かび上がります。**

特にジャズの演奏シーンは何度も登場しますが、その他にもヒッチハイクや長距離バスといった「路上」の移動スタイル､T シャツにジーンズといったカジュアルなファッションなど、当時のアメリカにおけるカルチャーの萌芽を垣間見ることができます。

特に印象に残っている場面 / 言葉

Sal は Dean の野生的な奔放さ、純真な狂気のようなものに魅了されて共に放浪しますが、私にとってはふたりとも魅力的です。ここに印象的なセリフを引用します。

まず、Sal が初めて西へ向かうとき、ロードサイドで休憩するシーンがあります。そこで彼は “I ate another apple pie and ice cream; that’ s practically all I ate all the way across the country, I knew it was nutritious and it was delicious, of course.” と語ります。当時の若者と言えば酒と煙草という偏見があったので、**意外な一面に親近感**が湧きました。私もいつか、アップルパイとアイスクリームを食べながらアメリカを横断したいです。

次に、２度目の旅の後、２人目の妻とサンフランシスコで落ち着いていた Dean を Sal が訪ねるシーンです。Dean は立てるようになったばかりの娘のことを “I’ ve just figured out she is thirty-one-and-a-quarter-per-cent English, twenty-seven-and-a-half-per-cent Irish, twenty-five-per-cent German, eight-and-three- quarters-per-cent Dutch, seven-and-a-half-per-cent Scotch, one-hun-dred-per-cent wonderful.” と話します。人種に囚われない “100% wonderful” という考え方に痺れました。

その本で思いを馳せた人・場所・価値観

娘への愛に溢れていた Dean ですが、結局は誘惑に負け、家庭を後にして Sal と３度目の旅へ出ます。これは彼らが「移動」の衝動に駆られていることの表れです。原始的なもの、未知の荒野への憧憬から西を目指していたはずですが、Dean は西の果て、サンフランシスコでの生活＝静止に満足しません。**彼らの旅には目的地がなく、「移動」それ自体が目的なのです。**どこか他のところへ行きたいと思うとき、心が求めているのはその場所が与えてくれるものなのか、それとも移動という行為が与えてくれるものなのか。私たちはその答えに気づくことができるでしょうか。

修士２年
合田　智揮

三四郎

夏目漱石　著
朝日新聞 (1908) ※写真は新潮文庫

本の概要と好きな理由

言わずもがな文学の巨星･夏目漱石による｢三四郎｣は、田舎から帝国大学に進学してきた三四郎の視点から、当時の知識人たちの交流や学生生活ぶりを鮮やかに描き出します。

三四郎の青春と苦悩は、100 年以上の時を超えてもなお色褪せていないことに驚かされます。特に、彼と同様に地方から東京に出てきて大学生活を過ごしている私には､共感する部分の多いこと。作中で三四郎が｢迷える子｣と指摘される場面は、地方出身者にとっての東京の不可解さというコノテーションを含んでいるようにも思われます。

ある日、三四郎は年上の友人である野々宮くんに｢一寸好い景色でせう。あの建築の角度の所丈が少し出てゐる。木の間から。ね。好いでせう。君気が付いてゐますか。あの建物は中々旨く出来ていますよ。工科もよく出来てるが此方が旨いですね｣と批評を展開されるも、その鑑賞力にたじたじになってしまいます。物事の所作や文化の違いに差し当たった時、田舎者たる私たちは、自分たちが劣後していると思ってしまいます。

一方でかつて駒場の授業で､｢田舎者とは単一の村文化しか知らない者のことであり、地方から上京してきた者を指すのではない。(むしろ東京の文化しか知らずに田舎出身を田舎者と蔑む人こそ田舎者である)｣と言われたことが印象に残っています。**文化や価値観の差異に困惑しながらも前進する姿に、かつての自分を重ね合わせながら読み進めました。**

特に印象に残っている場面 / 言葉

｢なにしろ東京のまん中にあるんだからーー静かでしょう。こういう所でないと学問をやるにはいけませんね。近ごろは東京があまりやかましくなりすぎて困る。｣三四郎池を指して、野々宮君が言ったセリフです。

静かな場所が必要なのは学問に限った話でもないかもしれませんが、**100 年を経ても色褪せないどころか、より一層強いメッセージ性**を放つフレーズではないでしょうか。

その本で思いを馳せた人・場所・価値観

東大を主な舞台として描かれるこの小説からは、100 年前と現在の空間を比較することができます。例えば、タイトルとも関連が深い三四郎池は、この本でもしばしば登場する空間ですが、当時は安田講堂がまだ建造されていなかったためか､あるいは三四郎が文科の学生であったためか、**キャンパスの中心が三四郎池とそのほとりにあった**ことが読み取れます。現在とは学生が空きコマや隙間時間で過ごす場所がやや異なりそうです。一方で、本郷通りのにぎわいや、本郷文化圏が持つ美術や芸術への意識の高さは、今と変わらない位相でテキスト内の都市空間が立ち現れていることがわかります。

学部４年
鈴木　元太

海をあげる

上間陽子　著
筑摩書 (2020)

本の概要と好きな理由

僕は基本的に一気読みしてしまうタイプなのですが、この本はあえて読み進めないでおこうと途中で積読にしていました。

「海をあげる」は沖縄出身・在住の教育学者上間陽子さんのエッセイ集です。筆者は娘と夫の三人で普天間基地の近くで暮らしながら、若年出産した女性の調査・支援を行っています。本書は筆者の幼少期の思い出や現在の生活、若者へのインタビュー記録など、断片的な出来事が集まって構成されています。

基地で使用される有害物質によって水道水が汚染されていることが発覚した時、虐待されて育ち一人東京に上京したホストから話を聞いた時、十七歳で出産した母親の家に行った時、辺野古問題に知人がハンガーストライキで抗議した時、**その全てが僕にとっては非日常な世界ですが、筆者の日常を構成する体験として記述されています。**

僕が一度読み進めるのをやめた理由は、筆者や登場人物の境遇を受け入れるのに時間がかかりそうと感じたからでした。しかし再読すると、この辛さは共感することの辛さではなく、**自分が「そちら側（だと思っていたもの）」に立った時、それまで見えていなかったことが見えてしまうことの辛さ**なのだと気づきました。

筆者の文章には怒りや絶望が通底していますが、そうした感情を持つにも体力が要ります。その**体力を持ち続けられることが優しさなのかもしれない**と思わされます。

特に印象に残っている場面 / 言葉

タイトルの一部にもなっているように「海」は本書にてたびたび登場します。

東京で暮らすホストの青年へのインタビュー後に、筆者は寺山修司の句「マッチ擦るつかのま海に霧ふかし　見捨つるほどの祖国はありや」を引用して青年の境遇に思いを馳せています。

他にも、祖父と妹の墓から見える海、戦時中多くの人が飛び込んだ海、埋め立てられつつある海が描写されています。**筆者にとって海はさまざまな記憶をつなぐメディアとして重要な意味合いを持っている**ことが伺えます。

その本で思いを馳せた人・場所・価値観

地域や物事に対する当事者性とは何なのだろうかと考えさせられます。

「生活者たちは、沈黙している。かれらに沖縄や米軍がどう見えているのか、かれらどんなときに黙り込むのか、私はそれをつぶさに知るわけではない。」という文章からは、**筆者が怒りを感じる問題を周囲の人は語らない現状**が読み取れます。

共感や想像の可能性に期待する一方で、共感しすぎると辛くなってしまうこともしばしばあります。**生活者として、また計画者として向き合うことの難しさと、その中でも持ち続けなければならないものを教えてくれている**ように思います。

以上３人の文章を紹介した。みなさんも多忙な日々の中、たまには小説で頭をリフレッシュする時間をとってみるのはいかがでしょうか？

ぼっち空間アンケート
～あなたのお気に入りのぼっち空間はどこですか？～

前頁では都市と文学との関連性に着目したが、今度は少し引いた目で見て、本を読むなどといった１人での活動は都市の中のどこで行われているのかに焦点を当てた。研究室の皆さんが普段１人で本を読んだり、ちょっとした作業をしたりする場所「ぼっち空間」はどこか、またその場所の良さや普段何をしているのかを教えてもらった。もしかしたらあなたのお気に入りのぼっち空間の参考になるかも（？）

アクティビティの種類

ぼっち空間の特徴・感想

工学部一号館図書館・ソファー席

中央食堂２階・電源のある席

宮城教授室（905）

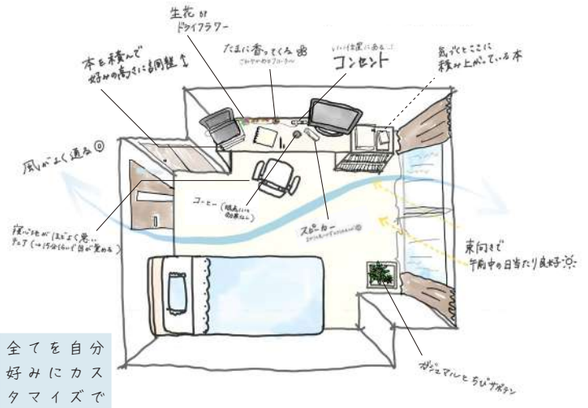
丸善丸の内本店 3F・Cafe1869 by MARUZEN のカウンター席

工学部 11 号館１階フリースペース・入口入って向かって右から２番目、手前から２列目の席

自宅から 10 分弱のジョナサン・元々喫煙ゾーンだったであろう区画の角席

自宅（下宿）

あらゆるPC作業



カフェ Lim, nearby my home in Komaba.

Starbucks パルコヤ上野店・電源のある席

Starbucks 宇治平等院店・一番奥のテラス

工学部前広場・大銀杏の下の椅子とテーブル

家のそばの道

いつもは通らないけど、もう一曲聞いて帰りたいときにまわり道する

工学部 14 号館・10F テラス

東大総合図書館前広場

昼食を食べる。電話する。

新宿区立納戸町公園

アメフトの自主トレ：フットワークやアジリティなど

建築学科に進み平日練に出られなくなった頃から、夜に自主トレをしている場所。適度な広さの公園の長軸上にハナミズキと時計塔があり、動作の基軸をつくる。寝静まったまちと地面を照らす月明かり。春の夜桜と秋のコウモリ。周囲の情報が適度に消され、自分の身体と向き合うことができる。夜だけでなく、雨の後もよい。湿り気を含んだ砂と空気が一層、身体の感覚を呼び覚ます。

井の頭公園

街の喧噪を忘れさせる。

ウォーカブル

程よく人がいて、自然が美しい。

散歩したり、ベンチでボーっとする。

COLUMN

POSTSCRIPT

M2 代のシメだとか、そんな重苦しいことは考えずに、興味関心の赴くままに羽を伸ばした企画にしました。最近続いた編集者の興味関心の色が強いマガジンはどれも違う味があり、現 M2 代の雰囲気も現れているようで好きでした。考えや価値観をシェアするという編集長のあいさつに図らずも (?) マッチしていたのではないでしょうか。次号から始まる M1 代のマガジンにも乞うご期待！（M2 合田）

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！
https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/

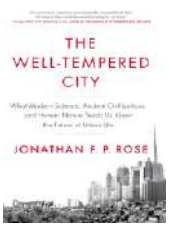
富士学苑高校で WS 開催

富士吉田 PJ では、20 名近くの高校生と一緒に下吉田地域について考える WS を開催しました。高校生ならではのフレッシュな意見が沢山出て、私たち院生も刺激をもらえるいい機会になりました。（M1 長谷川）

草刈り WS 開催！

みなかみ PJ では、使われなくなった温泉旅館の旧社員寮で地域の方々と、草刈りと WS を行いました。終始夢中で草刈りを行い、草木で覆われていた社員寮はすっかりきれいになり、爽快でした！（M1 永井）

BOOK OF THE MONTH



The Well-Tempered City
Jonathan F. P. Rose
Harper Wave

推薦者
M2 Yeshi

The book presents an insightful exploration of urban planning and reviews the five tenets for successful cities into policies with number of case studies. There is also integrative approach of urban planning considering education, infrastructure, economics, and the environment.

発行：東京大学都市デザイン研究室マガジン編集部
神谷南帆・合田智揮・杉本莉菜・若松凪人・渡邉大祐
伊藤純也・佐橋慶祐・高野楓己・橘俊輔・永井鷹一郎・長谷川帆奈・平野真帆・森屋友佑
発行日：2022 年 7 月 31 日